

St. Luke's International University Repository

不妊症患者を対象とした看護研究の動向 - 心理面に焦点を当てて -

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2009-12-08 キーワード (Ja): キーワード (En): Infertility, Nursing Research, Review 作成者: 森, 明子, 村本, 淳子 メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/10285/4675 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



原 著

不妊症患者を対象とした看護研究の動向

——心理面に焦点を当てて——

The Trend of the Nursing Research for Infertility

—Focusing Psychological Aspects—

森 明 子 (Akiko MORI)*

村 本 淳 子 (Junko MURAMOTO)**

要 約

この研究は、看護領域の不妊症に関する文献を検索し、不妊症の人びとの心理的問題を取り扱う研究の特徴を明らかにし、今後の研究に必要な課題を検討することを目的とした。系統的文献検索を行い、主題別分類と年次別推移の傾向をみた。さらに、心理面に焦点を当てた9文献について、研究の焦点、対象、方法の観点から分類し、比較検討した。その結果、心理に関する文献は1980年以降増加しており、1990年からは患者の体験・意味、対処を主題としたものの増加が著しいこと、本邦の文献数は全体的に少ないことがわかった。そして、9文献の詳細な検討から、対象とその体験している現象は何かということに研究の焦点が当てられていること、不妊夫婦または不妊の女性が研究の対象に選ばれていること、調査研究または質的研究が研究の方法として用いられていることがわかった。今後の研究の課題として、対象の範囲を広げることや現象に関与している要因および要因間の関係を分析あるいは検証する研究が必要であることが明らかになった。

Abstract

The purpose of this study was to clarify the characteristics of the nursing studies related to a psychological aspect of the patients with infertility, and to identify for needs of the further study. A systematic review of the literatures were conducted in order to analyze topics classification and its trends by years. The literatures related to the psychological aspects were selected and compared with their research questions, subjects, and methods.

As a result, the number of the related literatures increased since 1980s, and of the literatures focusing on the patients experiences, meanings, and coping behavior increased remarkably since 1990s, however there was a few number of Japanese literatures generally within the way of reference used on this study. It was found that the focus of the studies were on what the patients had experienced, and the couple or female patients with infertility were selected, and qualitative reserach methods were used.

*元聖母女子短期大学 (Former Seibo Junior College of Nursing)

**東京女子医科大学看護短期大学 (Tokyo Women's Medical College, School of Nursing)

In conclusion, the studies were limited on couple or female, more study needed on male. Studies were limited superficially on phenomena, more study shall be encouraged to clarify the factors related to the phenomena.

I はじめに

近年、生殖医学の進歩や新しい生殖技術の開発に伴い、それらの内容や適用対象となる不妊症の人びとに対する関心が医療従事者のみならず一般の人びとの間でも高まりつつある。出産・育児の渦中にある家族に対する支援を提供することの意義はいままでのないが、出産や育児の体験を望みながらも生殖を司る身体の器官・機能にさまざまな問題を有するためにそのニーズを容易に満たすことのできない対象を支援することもまた、助産婦の重要な役割の1つであると考えられる。

不妊は生殖期の人びとにとって大きな life crisis であり、心が傷つけられやすく痛みを伴う体験である。その支援のあり方を考えるためには、医学的・身体的側面だけでなく、不妊を体験している人びとの気持ちや心理社会的側面の探求が必要である。

欧米においては、すでに不妊症患者を対象とした心理面に焦点を当てた看護研究が増加しつつあり、それらの結果を踏まえて援助の視点やその方向性を論じた著述^{1),2)}もみられ始めている。しかし、わが国においてはいまだ、看護の視点による研究の数はきわめて少なく、対象の心理の状況や体験の実態もほとんど明らかにされていない。

そこで、この研究は看護領域の不妊症に関する文献を検索し、不妊症の人びとの心理的問題を取り扱う研究の特徴を明らかにし、今後の研究に必要な課題を検討することを目的とした。

II 研究方法

系統的文献検索を行い、看護領域における不妊に関する文献を主題別に分類し、年次別に推移をみた。さらに、不妊の心理的側面に焦点を当てた研究論文を分類し、比較検討した。

不妊症 (infertility) と看護 (nursing) をキーワードに用い、MEDLINE により1972年から1991年まで、JMEDICINE により1981年から1991年までコンピュータ検索を行い、それぞれを主題別に分

類し、年次別の変化の傾向をみた (表1, 表2)。また、索引誌 "International Nursing Index" により、1987年から1991年までマニュアル検索を行

表1 年次別主題別文献件数
(MEDLINE: 不妊症*看護)

| 主題 | 年次 | | | | | 計 | |
|--------------|-------------|------------|------------|------------|-----|-----|----|
| | '72 '74 | '75 '79 | '80 '84 | '85 '89 | '90 | | |
| 心理 以外 | 病因・診断・治療 | 2 | 9 | 15 | 21 | 5 | 52 |
| | 人工授精・体外受精 | 1 | 3 | 4 | 6 | 1 | 15 |
| | 免疫学・遺伝学 | 0 | 0 | 1 | 4 | 1 | 6 |
| | 外科学 | 1 | 0 | 3 | 0 | 1 | 5 |
| | 生理学 | 0 | 1 | 0 | 2 | 1 | 4 |
| | 公害・害 その他 | 0 | 0 | 1 | 2 | 0 | 3 |
| 計 (A) | 10 | 13 | 27 | 38 | 11 | 99 | |
| 心 理 | 病因・診断・治療 | 0 | 1 | 1 | 7 | 5 | 14 |
| | 人工授精・体外受精 | 0 | 0 | 1 | 3 | 3 | 7 |
| | 妊娠・流産 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 4 |
| | 体験・意味 | 1 | 1 | 1 | 9 | 1 | 13 |
| | 情緒 | 0 | 1 | 1 | 3 | 1 | 6 |
| | 対処 | 0 | 0 | 0 | 1 | 4 | 5 |
| 倫理・法律 その他 | 0 | 0 | 2 | 3 | 0 | 5 | |
| 計 (B) | 1 | 3 | 8 | 33 | 16 | 61 | |
| 合計 (A)+(B) | 11 | 16 | 35 | 71 | 27 | 160 | |

表2 年次別主題別文献件数
(JMEDICINE: 不妊症*看護)

| 主題 | 年次 | | | 計 | |
|------------|------------|------------|-----|----|---|
| | '81 '84 | '85 '89 | '90 | | |
| 心理 以外 | 病因・診断・治療 | 1 | 8 | 0 | 9 |
| | 人工授精・体外受精 | 0 | 2 | 0 | 2 |
| | その他 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 計 (A) | 1 | 11 | 0 | 12 | |
| 心 理 | 指 導 | 0 | 3 | 0 | 3 |
| | 対 処 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| | 情 緒 | 1 | 0 | 0 | 1 |
| | その他 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| 計 (B) | 1 | 5 | 0 | 6 | |
| 合計 (A)+(B) | 2 | 16 | 0 | 18 | |

表3 対象文献の

| No. | 著者名(発表年) | 対 象 | 数(人) | 平均年齢 | 特 性 |
|-----|---|-------------------------------------|--|------------------------------|---|
| A | Hirsch, A. M., Hirsch, S. M. (1989) | ・不妊夫婦 妻のみ ・非不妊夫婦 | 28組(56) (2) 17組(34) | 32 26 | ・平均結婚年数6.7 ・不妊クリニックに通院中 ・女性不妊18組 |
| B | Olshansky, E. F. (1988) | 不妊夫婦 | 7組(14) | | ・中流階級以上 ・IVFを試みた2組(1組妊娠), AIHを試みた2組, AIDを試みたり、試みる予定2組, hMGによる排卵誘発を試みた1組 |
| C | Sandelowski, M., Pollock, C. (1986) | 不妊女性 ・家庭医 グループ | (26) | (21~45) | ・女性不妊, 男性不妊, 原因不明 ・家庭医グループは全員が白人, クリニックグループは黒人20名, 白人2名で構成 |
| D | Sandelowski, M. (1987) | ・クリニック グループ | (22) | | ・治療期間は1年以内33%, 2~4年40%, 最長17年 |
| E | Blenner, L. L. (1990) | 不妊夫婦 | 25組(50) | 夫 (31~47) 妻 (28~40) | ・女性不妊9組, 男性不妊6組, 双方の原因8組, 原因不明2組 ・治療期間は4か月~10年間(平均4年間)治療中2組, 終結後23組 ・年収21,000~118,000ドル ・ペットがいる24組(犬17, 猫4, 犬と猫3), ペットがいない1組 |
| F | Blenner, L. L. (1991) | | | | |
| G | Davis, D. C., Dearman, C. N. (1991) | 不妊女性 | (30) | 30 (23~37) | ・女性不妊, 男性不妊, 原因不明 ・大病院の不妊専門医の下で治療中 ・8名は子どもがいる(出産による6名, 養子縁組による2名) ・白人28名, 黒人1名, 東洋人1名 ・有職者26名(専門職または技術職) |
| H | Sandelowski, M., et, (1989) | 不妊夫婦 | 40組(80) | 30代 | ・すべて白人 ・中流階級 ・出産した夫婦20組, 養子縁組した夫婦17組, すでに子どもがいて, 次の子どもを得る予定のない, かつて不妊だった夫婦3組 |
| I | Bernstein, J., et. (1988) | ・不妊夫婦 夫 妻 ・非不妊夫婦 夫 妻 | 32組 (20) (30) 20組 (11) (14) | | ・夫婦の互いの多因子による不妊か, 妻の排卵障害による不妊 ・平均5年半(最短2年)の不妊期間を経て妊娠・出産し, 親になった |

研究の特徴

| 方 法 | 焦 点 | 結 果 |
|--|-----------------------------------|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ・質問紙法；郵送法 ・研究者作成質問項目 ・Hudson 臨床測定尺度 ・Bem 性役割調査表 ・multifactor ANOVA | <p>不妊がidentityや結婚生活に及ぼす影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・不妊夫婦では非不妊夫婦より、男性性が高く、性的満足が低い ・不妊夫婦の、夫より妻の一般的満足が低い ・妊娠への投資が増すと、妻の自己尊重は低下するが、夫のそれは上昇する |
| <ul style="list-style-type: none"> ・Grounded theory 方法論 ・自由回答式面接方法 7 組共夫婦別席での面接 5 組は同席でも面接 ・比較分析 | <p>先端不妊治療を続けている夫婦の不妊や治療に対する認識</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・6 テーマが見いだされた 1. 追い詰められている状態 2. うまく生活していきにくい状態 3. 夫婦関係、性的関係の崩壊 4. 各配偶者の個人的意味による個別的反応 5. 財政上のストレス 6. 希望と失望が周期的につのらされる状態 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・現象学的方法論 ・自由回答式面接法 1 年 4 か月間に 2 回の面接 調査者は不妊歴ある既婚女性と子のない独身女性 ・Van Kaam の現象学的分析 | <p>女性の認識している不妊体験</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・3 要素が見いだされた 1. 両義性…曖昧さ、不確かさ 2. 時間性 3. 他者性 |
| | <p>不妊体験の「両義性」</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・両義性の内容 不妊の原因・診断・治療について 人生のコントロールについて |
| <ul style="list-style-type: none"> ・Grounded theory 方法論 ・自由回答式面接法 ・夫婦同席での面接 ・調査者は男女、2 名のチーム ・比較分析 | <p>不妊や治療に対する知覚のプロセス</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・8 段階が見いだされた 1. 気づき始める 2. 新現実直面する 3. 希望と決心を抱く *4. 治療に気持ちが集中する 5. 螺旋状に落ち込む 6. 解き放つ 7. 関心を移す 8. 焦点を転換する *4 が最も長い |
| | <p>不妊や治療の体験上にベットの果たす機能</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・25 組中 22 組の夫婦でベットは役立っていた ・夫婦の性別による反応の差はない ・ベットの果たす機能はストレス緩和 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・半構成式面接法 ・内容分析 | <p>女性の不妊に対する対処行動</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・6 つの行動に分類された 1. 不妊を思い出させるものと自分との間の空間を広げる 2. コントロールを取り戻す 3. 最善になるように努力する 4. 不妊の隠された意味を探す 5. 感情に従う 6. 他者と苦しみを分け合う |
| <ul style="list-style-type: none"> ・Grounded theory 方法論 ・自由回答式面接法 出産夫婦 5 回 (妊娠中 3 回, 出産後 2 回) 養子縁組夫婦 (子どもが来るまでの 3~4 か月ごと, 子どもが来てから 2 回) ・比較分析 | <p>不妊夫婦の親になるまでの移行のプロセス</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・親になるまでの移行過程は回帰的、反復的な「混迷」の過程であった ・4 つの資源をもとに意思決定する。 1. 利用可能なもの 2. 投資をすることで要求されるもの 3. 進んで投資したいもの 4. 選択しなかった場合に予測される無念さ ・6 つの追求パターンが見いだされた 1. 連続 2. 後戻り 3. 夢中に繰り返す 4. 並行 5. 休憩をとる 6. 一線を画する |
| <ul style="list-style-type: none"> ・質問紙法；郵送法 ・Hopkins Symptom Check List (SCL-90) ・妊娠する前および出産後の 2 回測定 | <p>不妊の経験が妊娠・出産成功後の心理に及ぼす影響</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・妊娠前と出産後の比較をすると、非不妊女性のそれよりも、不妊女性の「抑鬱」の上昇率が高い ・不妊原因、不妊期間による distress の差なし |

い、不妊症の心理に関する文献を抽出した。一次資料として入手可能であったもののうち、キーワードに心理的ストレス、心理的適応、生活様式変更事項、情動、悲嘆、自己概念のいずれかを含み、原著論文またはその研究の一部を取り上げて論じられている7文献と、マニュアル検索により得られた2文献を加えた9文献を対象に研究の特徴を分析、検討した(表3)^{3)~11)}。

研究者は総数13人であった。看護を専門領域とする研究者は10人で、9文献(7研究)すべてに含まれた。9文献のうち、2人の同一著者によるものが合計5文献〔それぞれ3文献(2研究)と2文献(1研究)〕が含まれた。看護以外の領域を専門とする研究者は、産婦人科学1人、精神医学1人、心理学1人であった。職種は、Ph.D 6人、看護学博士3人、看護学修士1人、登録看護婦1人、医師2人。所属機関は、大学10人、メディカルセンター1人、病院1人、その他1人であった。なお、調査地域は、7研究すべてがアメリカであった。

III 結 果

1. 文献件数および主題と年次推移

MEDLINEによる総検出件数は160件で、そのうち心理(キーワードにpsychologyを含むもの)61件、心理以外99件であった。年次別に合計件数を比較すると、80年代前半から前年代のおよそ2倍の割合で増加しており、特に心理の件数の増加

は著しい。

心理の主題は、病因・診断・治療と関連するものが最も多く、これに次いで不妊の体験・意味に関するものが多かった。80年代前半から人工授精・体外受精や倫理・法律に関するものが、同年代後半からは不妊経験後の妊娠・流産や不妊への対処に関するものが現れた。体験・意味は80年代後半から、対処は90年代に入ってから急激に増加していた。

なお、MEDLINEにより検出された心理61件中には、本邦の文献は含まれていなかった。

JMEDICINEによる総検出件数は18件で、そのうち心理6件、心理以外12件であった。年次別に合計件数を比較すると、80年代前半に比べ、同年代後半には著しい増加がみられる。MEDLINEによる80年代以降の検出件数と比較すると、きわめて少なく、主題の項目も限られていた。

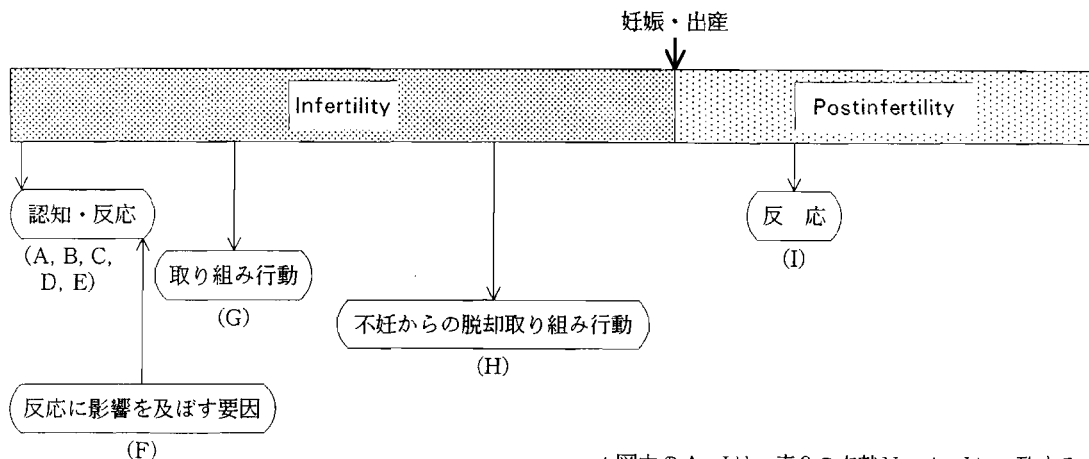
2. 不妊症患者の心理に関する研究の特徴

(1)研究の焦点

どのような側面に研究の焦点が当てられているかによって、対象文献を分類した(図1)。

まず、経験の過程として2区分した。不妊と向き合い、その問題を克服しようと試みている期間に焦点を置いたものと、不妊経験を経て親になってからの期間に焦点を置いたものとに分けた。

前者の区分は、不妊であることに対する認知・反応、反応に影響を及ぼす要因、不妊からの脱却取り組み行動、不妊からの脱却取り組み行動



*図中のA~Iは、表3の文献No. A~Iに一致する。

図1 対象文献の研究の焦点

動の4つの要素に分類した。

後者の区分は、妊娠・出産を経て親になってからの心理的な反応の1つの要素に分類した。

これは、不妊の心理的問題が不妊期間中のみにとどまるものではない可能性を示唆している点で、当事者にとっても援助提供者側にとっても重要であると考えられる。

以下、各要素ごとに該当する文献とその検討を加え、説明する。

1) 不妊に対する認知・反応

この項目に分類されたのは、文献A, B, C, D, Eの5文献であった。

文献Aは、不妊の問題とはまだ無縁であるということと不妊であるということとは、アイデンティティや結婚生活に及ぼす影響において、どのような反応の差を生み出すのかに焦点を当てた研究である。不妊であることは、自己同一性や、性、結婚の心理面に影響があるのかどうかをみようとしている。女性性、男性性、自己尊重、一般的な満足、結婚の満足、性的満足の6つの従属変数を設定し、独自に開発した9項目からなる質問紙と、Hudson臨床測定尺度およびBem性役割調査表を用い、不妊夫婦と不妊の問題とはまだ無縁である非不妊夫婦（対照群）との反応の比較が行われた。

その結果、非不妊夫婦（対照群）に比べ、不妊夫婦では、男性性が高く、性的満足が低かった。また、不妊夫婦間の比較では、夫より、妻の一般的満足が低く、妊娠のための投資が増すと、妻の自己尊重は減少するが、夫のそれは増加するというものだった。不妊という状況にあることは、それとはまだ無縁に生活している夫婦に比べ、自己概念や夫婦の関係にnegativeな影響を受ける傾向がある。特に夫に比べ、妻への影響が大きいことがわかった。

この研究では、不妊である対象と調査の時点では少なくとも不妊でない対象を比較することによって、不妊夫婦の心理的な反応をみようとした。また、不妊の夫婦間の反応の違いをみようとした。

文献Bは、先端技術による不妊治療を受けている患者の不妊や治療に対する認識はいかなるものであるかということに焦点を当てた研究である。先端技術による不妊治療を受ける人びとの反応の

特徴は何かをみようとしている。先端技術による不妊治療として、体外受精法(IVF)とそれに伴う治療的処置、配偶子卵管内移植法(GIFT)、人工授精が含まれていた。それらの治療法を受けている不妊夫婦の面接データから、比較分析が行われた。

その結果、6つのテーマが見いだされた。妊娠するまで何でも試みざるをえない、追い詰められた状態(Driveness)や、希望と失望が周期的に繰り返される状態(Exacerbated cycle of hope and despair)、治療のために自分たちの生活が妨げられ、うまく生活していきにくい状態(Difficulty getting on with life)、財政上のストレス(Financial stress)、夫婦関係や性関係の崩壊(Marital and sexual disruption)、各配偶者の個別的な意味による別々の反応(Uniqueness of responses)が明らかになった。この研究では、不妊である対象(かつ、ある特定範囲の治療法を受けている対象)のみの反応に視点を当てて、その特徴をとらえようとした。

研究結果として文献Aと一致しているのは、夫や妻らは、同じ反応を示すとは限らず、むしろ、個別に反応することが示されていることである。文献Bの研究者らは、その要因として、不妊の原因や結婚後、問題に直面するまでの期間、生物学的な性による違いを示唆している。一方、結婚に関しては一致がみられず、文献Aでは結婚の満足に対照群との差はなく、文献Bでは夫婦関係の崩壊が示されている。不妊であることが問題であるのか、先端技術による治療を受けていることが問題の要因となっているのか、あるいは不妊以前の夫婦の問題によるのか、この2つの結果のみでは結論できない。個々の夫婦あるいは夫婦間の反応の違いがどのような要因との関連において生じているのかを分析する研究に発展させることが必要であろう。

文献Cは、不妊を体験している女性側の認識はいかなるものであるかということに焦点を当てた研究である。不妊であることが、女性の認識に生じさせる特徴は何かをみようとしている。女性にのみ、面接し、Van Kaamの現象学的分析が行われた。

その結果、3つの要素が見いだされた。不妊の

原因や治療とその成果，行く末などについての不確かさである「両義性」(Ambiguity)，月経周期による時間設定や生殖期の時間制限の存在などの「時間性」(Temporality)，他者からの疎外感や理解してはもらえないという感情，妊娠できる人と不妊の人とのタイプ分けによる他者との区別と比較などの「他者性」(Otherness)が明らかにされた。

この研究では，家庭医(private physician)で治療を受けている比較的社会的階層の高い白人女性と，不妊クリニック(infertility clinic)で治療を受けている比較的社会的階層の低い，大部分が黒人女性との認識の違いに言及している点で意義深く，これらの3つの要素が強く出現していたのは白人女性であった。社会的階級あるいは人種の違いが不妊体験に対する認識に違った反応を生じさせる要因となる可能性が示唆されている。

文献Dは，文献Cの研究で得られた結果から，さらに「両義性」(Ambiguity)の内容について論及されている。両義性の内容には，何が含まれるかに焦点が当てられている。女性が認識する不確かさ，曖昧さは，おもに不妊の原因や診断，治療についてであり，自分の生活や人生のどっちつかずの宙ぶらりんさ，コントロールの難しさであった。

文献Eは，不妊夫婦の，不妊であることやその治療に対する知覚はいかなるものであるかということに焦点が当てられている。不妊であることやその治療を体験する人びとの知覚の特徴は何かをみようとしている。不妊夫婦の面接データから，比較分析が行われた。

その結果，知覚には過程があり，8つの段階が見いだされた。医学的な診断以前に気づき始める段階(Stage 1: Dawning of awareness)があり，診断を受けて事実と直面する段階(Stage 2: Facing a new reality)，治療に対して希望と決心を抱く段階(Stage 3: Having hope and determination)，治療に気持ちが集中する段階(Stage 4: Intensifying treatment)，エネルギーが枯渇し，情緒的に痛々しく，螺旋を描くように気持ちが下降する段階(Stage 5: Spiralling down)，不妊の問題を解き放っていく段階(Stage 6: Letting go)，治療を中止し，他のことに関心を移す段階

(Stage 7: Quitting and moving out)，焦点を転換する段階(Stage 8: Shifting the focus)があることがわかった。これらの段階のうち，最も長いのは治療に気持ちが集中し，妊娠するための努力に没頭する段階であった。

この研究から，不妊夫婦が診断され，治療を受けるプロセスには，段階的な心理の変化が認められることが明らかにされ，時期に応じた適切な援助の必要性が示唆される。特に，医学的な診断の前に疑い始める過程があることから，看護上のニーズは，この時点から存在すると考えねばなるまい。

2) 不妊に対する反応に影響を及ぼす要因

この項目に分類されたのは，文献Fであった。

文献Fは，文献Eの研究で得られた結果から，対象夫婦25組中の24組が犬や猫のペットを飼っていた事実に注目し，論及されている。ペットを飼っていることは，心理面にどのような影響を及ぼす要因となっているのかに焦点が当てられている。

88%の夫婦にとって，ペットは，不妊であることや治療によるストレスに対処するうえで，ストレスを緩和する治療的機能を果たしていることがわかった。具体的には，喪失の置き換えとしての機能，情緒を癒す機能，他者や社会と彼らとを橋渡しして結び付ける機能があることが明らかになった。

不妊に対する反応に影響を及ぼす要因として，この結果から，negativeな反応を緩和するpositiveな要因として作用するものの存在があることを示している。援助の一視点としてはユニークな観点を提供するものである。

3) 不妊に対する取り組み行動

この項目に分類されたのは，文献Gであった。

文献Gは，不妊を体験している女性側の取り組みの行動はいかなるものであるかということに焦点を当てた研究である。不妊である女性の対処行動にはどんな種類があるのかをみようとしている。女性にのみ，面接し，内容分析が行われた。

その結果，6つの対処方略が見いだされた。不妊を思い出させる状況から距離を置く(Increasing space)，知識を増やしたり，時間制限を設定してコントロールを取り戻す(Regaining control)，

生活のさまざまな側面で最善になるように努力する (Being the best), 不妊であることの隠された意味を探す (Looking for hidden meaning), 泣いたりわがままな行動をとったりと感情に従う (Giving in to feelings), 夫や他の不妊女性と苦しみ分け合う (Sharing the burden) などが明らかになった。

研究者らは、不妊の問題を抱えた女性たちが上手に対処方略を使えるように、励ましたり、示唆を与えたり、一緒に探すなどの看護援助が重要であると述べている。この結果は、まさに、より実践的な援助のあり方を検討するうえで有用である。

4) 不妊からの脱却を試みる取り組み行動

この項目に分類されたのは、文献Hであった。文献Hは、不妊夫婦が不妊体験から脱却し、親になるまでの過程はいかなるものであるかということに焦点を当てた研究である。不妊から脱却しようと試みる、親になるまでの間の人びとの行動の特徴は何かをみようとしている。かつて不妊で、親になった夫婦の面接データから、比較分析が行われた。

その結果、親になるまでの移行過程は、回帰的、反復的な「混迷」(Mazing)のプロセスであり、多大な時間的、精神的、身体的エネルギーおよび経済的資源の消費が要求されることがわかった。自分たちが利用できるものは何か(Available)、投資することで要求されるものは何か(Required)、進んで投資したいものは何か(Willing to invest)、選ばなかったことで残る無念な気持ちの程度はどれほどか(Regret)、という4つの資源をもとに意思決定を繰り返した。そして、連続して続ける(Sequential tracking)、後戻りする(Backtracking)、夢中になって繰り返し反復する(Getting stuck)、複数の選択肢をもちつつ並行する(Paralleling)、休憩をとって一時中止する(Taking a break)、ここまでという一線を画する(Drawing the line)、という6つの追求の行動パターンが明らかにされた。

この研究から、どのようにして不妊の夫婦が不妊の問題から脱却しようとするのか、その意思決定のあり方や、進み方を判断し、促進することで夫婦の問題解決過程を支援することの必要性が示

唆されている。

5) 不妊経験を経て妊娠・出産に成功し、親になった後の反応

この項目に分類されたのは、文献Iであった。

文献Iは、不妊の問題とはまったく無縁であったということと不妊であったということとは、出産後の心理に及ぼす影響において、どのような反応の差を生み出すのかに焦点を当てた研究である。不妊を経験したことは、出産後の心理面に影響があるのかどうかをみようとしている。敵意、不安、抑鬱、精神病性、人間関係の感受性、身体化、パラノイド観念形成、妄想的一強迫性、恐怖症的不安の9つのサブスケールからなる、Hopkins Symptom Check Listを用い、不妊であった夫婦と不妊の問題とはまったく無縁であった非不妊夫婦(対照群)との反応の比較が行われた。

その結果、非不妊夫婦(対照群)の妻に比べ、不妊であった夫婦の妻では、妊娠前と出産後の2度の測定結果を比較したとき、抑鬱の上昇率が高かった。夫の反応の有意差および不妊の原因や不妊期間の違いによる心理的distressの差は認められなかった。出産後の心理に影響する因子はさまざまあると思われ、この反応がどのような因子によって生じているものなのか、真に不妊経験によるものなのか、特定するための詳細な情報に欠けている点がこの研究の限界である。しかし、不妊を経験したことによる出産後の心理面への影響を残しうる可能性を示唆している点や文献Aや文献Bと同様、夫婦の間で異なった反応が認められた点で重要である。

(2) 研究の対象

9文献のうち、文献Aと文献Iは、対象を不妊夫婦だけでなく、非不妊夫婦も加え、その比較を通して不妊夫婦の反応をみようとしていた。これに対し、文献B、文献EおよびF、文献Hでは不妊夫婦だけを対象として、その反応や行動の特徴をとらえようとした。文献CおよびD、文献Gは、不妊の女性を対象として、その反応や行動の特徴をとらえようとした。不妊の男性を対象とした研究は、今回検討した9文献には含まれなかった。

また、その研究の焦点によって、文献A、文献B、文献CおよびD、文献Gは、不妊とその治療の渦中にある段階の人びとを対象に選んでいた。

文献EおよびF、文献H、文献Iは、大部分がすでに治療を終結したり、子どもを得た段階にある人びとを対象に選んでいた。

9文献の研究対象すべて（対照群を除く）が、不妊であることを医学的な診断、治療を通して、認識している人びとであった。正式に診断したり、治療することを選んでいる、あるいはそうした行動を選ぶことのできない不妊の人びとを対象にした研究は含まれていない。

(3)研究の方法

9文献中、文献Aと文献Iは、調査研究であった。いずれも郵送法による質問紙法で、データの回収率は、文献Aの場合、不妊夫婦（妻のみ含む）63%、対照夫婦42%、文献Iでは、不妊夫婦の夫50%、妻75%、対象夫婦の夫55%、妻70%となっていた。文献Aと文献I、どちらの研究も妥当性、信頼性が確かめられている測定用具が用いられていた。

文献B、文献CおよびD、文献EおよびF、文献G、文献Hは質的研究であった。質的研究法がとられたなかでも、文献Gを除く4つの研究は、現象学的アプローチやGrounded theoryアプローチによるものであった。これらのいずれの研究も、自由回答式の面接法によってデータ収集され、現象学的分析や比較分析によってデータ分析された。文献EおよびF、文献Hは、調査者が家庭に出向いて面接が行われたことが明記されていた。文献CおよびDの面接は、数年間の不妊経験のある女性（40代前半、既婚、子ども一人あり）が主となり、自由意思で子どもをもたない生活を選んでいる女性（30代後半、未婚、子どもなし）が共同して行われた。彼らはいずれも白人で、中流階級に属していた。文献EおよびFの面接は、夫婦同席の条件としたことから性別を同じにし、気楽に反応しやすいようにと、女性の調査者と男性の研究助手がペアになって行われた。分析結果の信頼性、妥当性については、いずれの研究も、データ提供者にみてもらって保証を得る、他の研究や出版物との比較をする、調査者間で再分析する、あるいは調査に加わらなかった看護者に分析してもらう、など、この種の研究方法では重要な手順が踏まれていた。

IV 考 察

1. 文献の動向について

看護領域における不妊症の心理に関する文献は、1980年代前半から著しく増加している。特に最近では、不妊の人びとがその体験をどのように受け止めているか、あるいはその問題にどのように対応しているかを主題とした論文が著しく増加している。これは、1970年代終末から1980年代初頭にかけて、新しい生殖技法が導入されたことによる影響が大きいと思われる。不妊症患者の存在がクローズアップされ、新たな心理社会的問題が指摘されるようになったことに看護研究者たちの関心が増大したことの表れとみることができよう。生命倫理や法的な問題とともに不妊治療とそれを受け取る人びとのこころの問題や生活の質も問われなければならないことに気づき始めたものと思われる。

欧米と本邦の看護研究の比較においては、今回の検索方法では、本邦の文献が索引されにくく、また、網羅されていない可能性を考慮する必要がある。MEDLINEやJNIに掲載される論文は欧文抄録を有し、原著の形式を踏んだものが多いと思われ、そうした形式をもたない研究論文については索引されにくいことが考えられる。本邦の不妊の心理に関する看護研究論文は、欧文抄録をもたず、原著の形式を踏まないものが多いのではないかと考えられる。JMEDICINEについては、「不妊症」と「看護」の2つのキーワードに他のキーワードを組み合わせることで検出される論文数が増えるのではないかと考えられる。したがって、本邦のこの種の研究論文全体の数や主題としては今回検索された数、種類より多い可能性がある。そこで、本邦の研究論文の動向をより正確に把握するためには、今回の検索方法のほかに工夫が必要ではないかと考える。

2. 研究の焦点について

今回検討した文献は、対象に認められる現象は何かということに焦点が当てられている研究で占められている。対象に焦点が当てられ、そこに起きている現象を記述し、命名したり、説明することが目的とされている。不妊という状況なり、問題がどんなふう体験されているのか、どんな

影響が及んでいるのかについて知ろうとしている。系統的ではなくても、体験や反応とともに、それらに影響を及ぼしている要因がいくつか指摘されている研究も認められる。今後は、看護の視点からの援助の探索を深めるために、分類された反応と関連し合う要因を分析する研究や要因間の関係を検証する研究、援助に焦点が当てられた研究などが必要であると思われる。また、今回検討した文献はすべてアメリカにおける研究であり、これらの現象が社会・文化的、歴史的背景の異なる本邦の対象においてもみられるのかどうかを確かめることも必要であろう。

3. 研究の対象について

今回検討した文献は、不妊の夫婦または不妊の女性を対象にした研究で占められている。不妊は女性側だけでなく、男性側にとっても何らかの意味や特徴をもつ体験であると思われ、今後は、男性を対象にした詳細な研究も必要である。

研究結果から、不妊の心理の特徴として、それはプロセスであり、変化していくことが明らかになっている。研究の目的によって、適切な時期の対象を選択する必要があるだろう。

また、不妊の人びとに対する支援のあり方を考察するためには、医学的には不妊であるとしても、それを診断して明らかにしたり治療することを望まない人や、望んでもそうできない人を対象にした研究も必要である。なぜ望まないのか、望みながらなぜできないのか、追求が必要である。治療を受けている不妊の人びとだけを対象としていては偏った見解を導く恐れがあると思われる。

対象の選択については、7研究すべてが、研究への同意が得られ、協力の意志のある人びとを対象に行われており、研究の倫理的側面が配慮されていたことは重要な点である。しかし、同意と協力が得られず、研究対象となりえなかった人びとにこそ、その研究に必要な情報が所有されているかもしれないという問題が、この種の研究の方法の問題点として指摘されている¹²⁾。また、特に文献数の少ないわが国においては、不妊症患者に対する看護に関する知識が得られにくい、臨床現場で看護者が体験する現象を整理しにくいといった現状を生み出しているのではないかと推測される。看護者側はどのような反応を示し、どのような体

験をしているのか、看護者を対象にした研究が行われることも意義深いと考える。

4. 研究の方法について

今回検討した文献は、調査研究または質的研究法がとられている。

データの収集に関して、調査研究で用いられた測定用具は、その信頼性、妥当性が確かめられているが、それを選択した理由の記述はなく、不妊の人を対象にしたときに適したものであるのかどうかの検討や注意深い変数の設定が必要である。質的研究では、面接の方法にいくつか工夫がみられる。夫婦を対象に同席で面接する場合、調査者側も男女を組み合わせてセッティングしたり、不妊の体験者と子どもはいないが自由意志でそうしている者との両者を調査者にするなど、データの質を高めるうえで役立っていると思われる。

今後は、現象に関与する要因を深く分析するような質的研究や、要因間あるいは概念間の関係を検証する研究デザインが求められる。

V 結 論

1972年から1991年まで看護領域の不妊症に関する系統的文献検索を行い、さらにその中から心理に関する9文献の検討を行った結果、以下の事柄が明らかになった。

1. 看護領域における不妊症患者の心理に関する文献は、1980年以降増加傾向を示し、特に1990年からは患者の体験や意味、対処を主題とした論文の増加が著しい。本邦の文献数は、今回の検索方法では全体的に少ない傾向がみられたが、検索されなかった論文もあると思われ、より正確な動向を把握するためには検索方法の工夫が必要である。
2. 研究の焦点は、すべて対象に当てられていた。対象の経験の過程は不妊の問題に取り組む渦中にある段階と、その過程を経て親になってからの段階とに2区分され、いずれかの過程にある対象に焦点が当てられていた。また、対象の体験している現象は何か、反応や認識は何かということに焦点が置かれた因子探索レベルであった。
3. 研究の対象は、不妊夫婦または不妊女性で占められ、不妊男性のみを対象とした研究および

看護者を対象とした研究は含まれなかった。

4. 研究の方法は、調査研究または質的研究法がとられていた。

引用文献

- 1) Unruh, A. M., McGrath, P. J., The Psychology of Female Infertility: Toward a New Perspective, *Health Care for Women International*, 6(5-6), 369-381, 1985.
- 2) Woods, N. F., Olshansky, E. F., Draye, M. A., Infertility: Women's Experiences, *Health Care for Women International*, 12(2), 179-190, 1991.
- 3) Hirsch, A. M., Hirsch, S. M., The Effect of Infertility on Marriage and Self-Concept, *J Obstet Gynecol Neonatal Nurs*, 18(1), 13-20, 1989.
- 4) Olshansky, E. F., Responses to High Technology Infertility Treatment, *Image J Nurs Sch*, 20(3), 128-131, 1988.
- 5) Sandelowski, M., Pollock, C., Women's Experiences of Infertility, *Image J Nurs Sch*, 18(4), 140-144, 1986.
- 6) Sandelowski, M., The Color Gray: Ambiguity and Infertility, *Image J Nurs Sch*, 19(2), 70-74, 1987.
- 7) Blenner, L. L., Passage Through Infertility Treatment: A Stage Theory, *Image J Nurs Sch*, 22(3), 153-158, 1990.
- 8) Blenner, L. L., The Therapeutic Functions of Companion Animals in infertility, *Holist Nurs Pract*, 5(2), 6-10, 1991.
- 9) Davis, D. C., Dearman, C. N., Coping Strategies of Infertile Women, *J Obstet Gynecol Neonatal Nurs*, 20(3), 221-228, 1991.
- 10) Sandelowski, M., Harris, B. G., Holditch-Davis, D., Mazing: Infertile Couples and the Quest for Child, *Image J Nurs Sch*, 21(4), 220-226, 1989.
- 11) Bernstein, J., Mattox, J. H., Kellner, R., Psychological Status of Previously Infertile Couples After a Successful Pregnancy, *J Obstet Gynecol Neonatal Nurs*, 17(6), 404-408, 1988.
- 12) Carr, E. K., Friedman, T., Lannon, B., Sharp, P. C., The Study of psychological Factors in Couples Receiving Artificial insemination by Donor: a Discussion of Methodological Difficulties, *Journal of Advanced Nursing*, 15(8), 906-910, 1990.